



黒岩 恵美さん 伊藤 二實男さん・セイ子さん
Kuroiwa Emi Itou Fumio・Seiko
(左から) [御船町] [岩下一区]

伊藤さんが初版から編集を務める文化協会の機関誌「ふるさと」には、自身のバイタリティ溢れる人生を書き記した「つれづれぐさ」を寄稿している。

不自由でも幸せ 挑戦が人生を切り開いた

「まずこれを読んでください」と差し出されたメモ（※取材に際し、事前に用意してもらったもの）の一行目には、「私が一番の幸せ者です」と記されていた。

まちの習字の先生「緑石先生」こと伊藤二實男さんは、88歳となった現在も、印鑑店や書道教室を営みつつ文化協会の役員を務めるなど多方面で活躍している。

自らを「果報者」と言う伊藤さんは、中学生のころ不慮の事故で聴力を失った。「けれど、いろいろな事にチャレンジするうちに、障がい者であることを気にしなくなりました。『不自由でも幸せ』と感じる出会いをたくさんもらった」と話す。

学生時代から養鶏や樹木栽培などに挑戦してきた伊藤さんは、甲佐町の文化振興を牽引してきた町文化協会の発起人でもある。「当時は若くて情熱もあったから、『ちょっと待って』と思うような場面でも誰も止められなかった」と娘の恵美さんは苦笑する。

大学進学に向け勉強強していたころ、新聞の広告欄で「身体障がい者更生指導所」の募集広告を偶然見つけ、刻印科に入学した。「あのまま大学に行っていたら就職は難しかったと思う。技術を身につけた方が良くだろうと判断した自分は偉かった」と当時の自分を誇らしげに語る。これが、人生の大きな転機となった。

刻印科で篆刻の技術を1年間学んだ伊藤さんは、昭和32年に商店街に印鑑店「緑石堂」を開業する。ほどなくして篆刻に必要なと考え、故村上芳園先生に師事した。主に隷書や篆書を学び、やがて日展に入選するまでの腕前となった。挑戦と努力が実を結び始めた。

書道教室は、子どもたちの親から習字を教えてほしいと頼まれたことが始まり。教室からは、教師や書道家の道を歩む者も育っていった。伊藤さんは「書道を生業にすると思わなかった」と笑う。

スーパーのチラシをチェックし、食料品の買い出しに行くことも楽しみだという。店に久留米餅の商品を置き始めたころから昼食の準備は伊藤さんの担当となっている。好奇心旺盛な伊藤さんにとって料理もまた新たな挑戦なのだろう。

メモには、これまで書道を通じて出会った子どもたちなど多くの人々への感謝の言葉と共に「家内との出会いが私を最も豊かにしてくれた」と書かれている。妻のセイ子さんは、ときに伊藤さんの耳や声となり、共に時代を生き抜いてきた。このことは「二人は大変な苦勞をしてきたと思います」と語る恵美さんの言葉からも伝わってくる。

「これまでやってきたことを極めたい。積み上げてきたものを惜しみなく次世代に伝えたい」と語る伊藤さん。相棒セイ子さんとの二人三脚の挑戦は続く。